

また「哈屯城即阿敦城」と記せば、ウゲーノールの西方に於て、西南より流れ來りてオルコン河に入れるタミール河濱に、今阿敦城と名付くる所ありて、之を以て當時の可敦城と見んとせるものなるが如きも、余は今此の河濱に於てかゝる地名を認むるを得ざるともに、張德輝の記せる契丹の故城なるものは、前述の如くオルコン河の東にあらざる可らざるを以て、氏の説に對しても未だ之を認むるを得ず。要するに長春真人及び張德輝の記せる契丹の兩故城なるものゝ中、其の一は可敦城即ち鎮州と考ふるを得べく、而して之が位置については、長春の記する所によりては詳らかに知るを得ざるを以て、主として後者に從ひて、トラ河の南に沿へる地、若しくはウゲーノールの正西に位したるものと見るに止めんとす。

此の如くにして大石は出走の後、先づ漠北トラ・オルコン兩河間の地方に駐りしが、此の地に於ける動靜については、僅かに金史粘割韓奴傳によりて、少しく之を推知し得るに過ぎず。即ち天會「三年都統完顏希尹言、聞夏人與耶律大石約曰、大金既獲遼主、諸軍皆將歸矣、宜合兵以取山西諸部、詔答曰、夏人或與大石合謀爲釁、不可不察、其嚴備之」と。此の記事によりては、彼が當時何れの地にありしかを知るに難けれども、同傳には更に之に續きて「七年泰州路都統婆盧火奏、大石既得北部二營、恐後難制、且近群牧、宜列屯戍、詔答曰、以二營之故發兵、諸營必擾、當謹斥候而已」と記せり。泰州なるものは前記の如く今の東蒙古郭爾羅斯部前旗の西境に當り、嫩江と松花江との合流地點の西方に近き所なり。而して大石の動靜が此の地方の都統なる婆盧火によりて報告せられ北部二營を得たりといひ、また群牧に近しといはるゝより考ふれば、此の年即ち金の天會七年(一一二九)には、彼は尙ほ外蒙古に駐りて恢復の計を回らせしものなるを推知するを得べく、従つて先きに完顏希尹が大石の消息を報告せし際